

細則様式第 1－2 号

学位請求論文の内容の要旨

領 域	健康支援科学	分 野	障害保健学
氏 名	村上 正和		
(論文題目) 自宅退院後の家族介護者の介護負担感に関する研究			
主 査	若山 佐一		
副 査	吉田 英樹		
副 査	門前 暁		
副 査	高見 彰淑		
<p><序論></p> <p>我が国の要介護高齢者は平成24年度には545.7万にまで増加している。加えて、要介護者と同居している介護者は全体の64.1%に上り、家族介護者の介護負担感の増加が懸念される。このような背景から、在宅生活を送る被介護者とその同居家族を対象として、介護負担感に関する研究が数多く行われている。しかし、脳卒中や骨折などを発症し、初めて入院治療を必要とした患者を介護する家族介護者を対象に、自宅退院直後の介護負担感の状況について報告した文献は殆ど見当たらない。脳卒中などにより、被介護者の能力は発症前比べて短期間で変化していることが予想さる。それにより、同居家族は様々な介護を一辺に強いられるだけでなく、長年在宅介護を続けている同居家族に比べ、急激に介護負担感が生じるリスクが高いと考える。岡本はストレスを生じうる事象に対する予測の有無が心理的ストレスに影響するとしており、ストレスを生じうる事象を予測できている方が、予測できていない場合に比べて心理的ストレスが少ないと報告している。この考えを介護負担感の発生に当てはめて考えると、自宅退院後初めて介護に直面する家族の場合、事前にどの程度の介護が必要か予測できないことが、介護負担感発生の一因となる可能性がある。本研究ではこれらの仮説を検証し、自宅退院後の介護負担感発生リスクが高いケースを特定することを目的とした。</p> <p><第1章:家族介護者の介護負担感との関連因子についての文献的考察></p> <p>【目的】在宅要介護高齢者を介護する家族介護者を対象とした先行研究をレビューし、次研究への着眼点を得ることを目的とした。</p>			

(注) 論文題目が外国語の場合は、和訳を付すこと。

【方法】 CiNii及びPuB Medによる文献調査

【結果】 CiNiiでは49編, Pub Medでは24編の論文が対象となった. 検討論文数5編以上, 且つ, それらの半数以上で介護負担感との関連性を認めた要因を以下に示す.

①被介護者要因: 認知機能障害の程度, 認知症における行動・心理症状(Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia), 日常生活活動(Activities of Daily Living: 以下, ADL)の自立度

②介護者要因: 生活の質, 抑うつ, 健康状態, 目の離せない時間

③社会支援: 介護相談者の有無, 介護サービスの利用数, ショートステイの利用

<第2章: 自宅退院1か月後の介護負担感に関連する因子の検討>

【目的】自宅退院後の家族の介護負担感に関連する因子を検討することを目的とした. さらに, 退院前に家族介護者が予測した介護と, 退院後の実際の介護の差(以下, 予想との差)が介護負担感に影響するか検討することを目的とした.

【方法】対象者は当院を退院した患者及び家族介護者25組50名とした. 被介護者には, 年齢, 性別, 介護度, Mini-mental state Examination(以下, MMSE), 機能的自立度評価表(Functional Independence Measure: 以下, FIM)を調査した. FIMのみ退院時と退院1か月後の2時点で評価し, その他の項目は退院時にのみ行った. 家族介護者には退院1か月後に, 年齢, 性別, 続柄, 介護負担感の評価として日本語版Zarit介護負担尺度短縮版(The short version of the Japanese version of the Zarit Caregiver Burden Interview: 以下, J-ZBI_8)を評価した. また, 予想との差は, 「実際の介護は退院前の予想と比べていかがですか?」という質問に対して, 非常に楽, やや楽, やや負担, 非常に負担の4件法で聴取した. 介護環境として, 1日の睡眠時間と1日の介護時間を, 入院中の被介護者—介護者間関係として, 入院中の面会頻度とリハビリテーションの見学頻度を聴取した. 解析は介護負担感と各項目との関連性を確認後, J-ZBI_8を従属変数, その他の項目の内 J-ZBI_8と関連の認めた項目を独立変数としたステップワイズ法の重回帰分析を実施した.

【結果】J-ZBI_8と関連を認めた項目は, 被介護者要因では退院1か月後のFIM排便コントロール・記憶であり, 介護者因子では予想との差, 介護環境では1日の睡眠時間であった. 重回帰分析で採択された項目は, 予想との差, 1日の睡眠時間であった.

＜第3章：家族介護者の予想との差と睡眠時間に関連する因子の検討＞

【目的】第2章では、介護負担感が少ない家族介護者の特徴として、自宅退院後の介護の程度の予測精度が高いことと、1日の睡眠時間が長いことが示された。本章では、退院後の家族介護者の予想との差及び睡眠時間に影響する因子を、被介護者や介護者の特性、及び入院中の被介護者－介護者間関係から明らかにすることを目的とした。

【方法】対象者は当院を退院した患者及び家族介護者31組62名とした。被介護者には、年齢、性別、介護度、MMSE、FIMを調査した。家族介護者には、年齢、性別、続柄、J-ZBI_8、予想との差を評価した。介護環境として、1日の睡眠時間と介護時間を、被介護者－介護者間関係として、入院中の面会頻度とリハビリテーションの見学頻度を聴取した。調査はすべて退院1か月後に実施した。解析は予想との差と睡眠時間それぞれを従属変数としたステップワイズ法の重回帰分析を実施した。独立変数の選択基準は、各従属変数との相関係数が0.20以上であることとした。同時に、ADLに対する家族指導をより具体的に検討するため、FIMの運動項目のみを独立変数とした分析を実施した。

【結果】予想との差を従属変数とした重回帰分析の結果採択された項目は、FIMの記憶・理解・社会的交流、面会頻度であった。FIM運動項目のみを独立変数とした場合は排便コントロールが選ばれた。睡眠時間を従属変数とした重回帰分析の結果採択された項目は、FIMの記憶であり、FIM運動項目のみを独立変数とした場合は排便コントロールが選ばれた。

＜考察＞

本研究で新たに発見された知見として、退院後の介護の予測精度が介護負担感に影響することが明らかとなった。予測精度を低下させる因子として、被介護者が認知機能の低下によってADL上の障害を呈している場合や、排便のケアに介助を要している場合、また、入院中の面会頻度が少ない場合が挙げられた。同時に、介護者の睡眠時間が短い場合にも介護負担感が発生しやすく、被介護者が記憶の障害を呈することと排便のケアに介助を要していることが、睡眠時間を減少させ得る要因であることが明らかとなった。排尿ではなく排便が選ばれた理由としては、排便では量や形状によってはオムツやパットでのコントロールが困難であり、清拭にも時間がかかることが考えられる。これらの事象が当てはまる患者・家族に対しては、退院前に具体的な介護のイメージを家族介護者に提供することが重要であると考ええる。

【細則様式第 1 - 2 号続き】

学位論文のもととなる研究成果としての筆頭著者原著

論文題目	Factors influencing the burden on caregivers of patients at one month after discharge from convalescent ward
著者名	Masakazu Murakami, Akiyoshi Takami, Ai Shimaya, Misato Makino, Hideki Yoshida
掲載学術誌名	Hirosaki Medical Journal
巻, 号, 項	未定(受理済み)
掲載年月日	2018 年 3 月(予定)